

---

# 天誅だ！

ぬじゅわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天誅だ！

### 【NZコード】

N8468M

### 【作者名】

ぬじゅわきし

### 【あらすじ】

秘刀ドコダカ丸を手に入れた某太郎は、それ以来その刀を身につけるようになる。身につけた途端「正義」に目覚め、ドコダカ丸は血を欲し、時折ひとりでに人を殺しそうになる・・・そしてはげ頭のオヤジが現れ・・・

「これが、秘蔵の刀、ドコダカ丸でござります。」

刀職人が刀を差し出して言つ。某財閥の御曹司の某太郎は、その刀を受け取つた。刀職人は話を続ける。

一代々刀職人のドコタツ家の先祖が作り上げた伝説の名刀  
暫らく見つかりませんでしたが、最近発見されました。」

スワンツ 鞘から某太郎は刀を取り出した。金属部分が薄暗い陽光で冷たく光っている。太郎はそれを見ながら薄笑いして言った。

なるほど  
じつは素晴らしき刀で  
買ひきり

刀を握った途端から彼は“正義”に目覚めた。彼は、自分は義賊であると言う確信があった。悪の人間を切り捨ててやるべきだと思った。以来、どこか行くたびに彼は腰に刀をぶら下げていた。

某は高校生であつた。端正な顔立ちで、制服の学ランが良く似合つた。そこに平然と腰に刀をぶら下げるのだから、一見すれば非常に危ない人である。従つて電車内では周りの人気が若干彼から離れていた。彼は周りを見渡していた。極普通のメガネをかけた40代会社員の男性や、乳児を抱えた女性、よぼよぼの老人や、8歳の子供、それが自分が切り落とすにはふさわしいかを見極めていた。

「某君、なにその刀ー？」

クラスメートの花子が腰の刀を見て話しかける。某は答える。

「相手に悪い気せり落つかぬのアガ

ちつとも笑えないのに「うける」と言う。無表情の某は心内で激し

く憤り、一瞬刀がガタガタつと震えて思わず柄を握りそうになつたが、すぐに思い直し、平静を装つて乾いた笑いをした。

「……………」

授業中も彼は刀を持っていた。だが、座ると、鞘をつけた刀の先が床にぶつかるため刀を机の上に置いていた。周りの席が彼の席と少し離れていた。

「某、刀しまえ。」

と先生は言う。だが、彼は刀をしまわず先生を狂った目つきでじろじろ睨んだ。先生はそれ以後刀に対する事を一度も口にしなかった。まあ、普段は真面目な生徒だし、大丈夫だろう、ということであつとく事にした。

そして、帰りの電車。彼の周りには会話をしている他校の学生やゲーム機を見つめている男、彼は刀を腰に付け、街を徘徊した。電車の中には色々な人々がいる。会話をしている学生、ゲーム機を見つめている会社員、息子を膝の上にのせる母親。どれが切り落とすのにふさわしいか、とつい周りを眺めてしまう。そして切り落としたときを想像して彼はにやにやした。

電車に降りると、某は禿げ頭のオヤジが前を歩いているのを見た。

腰の刀がまた震えるのを感じた。刀が血を欲していたのだ。無論、本当に刀が震えているわけではない。某が勝手にそう感じたのだ。思わず片手が刀の柄を握るのを感じた。禿げの後頭部を見て、無性に天誅をしたくなつた。勝手に某の口元が上に引き攣り「いひひ、いひひ、いひひひひ」と笑うのを感じた。

「いひひひ、いひひ、いひ」

ふと、禿げが後ろを振り返つた。某は慌ててひき笑いを止め、普通に歩いている振りをした。彼は一瞬正気に戻つた。だめだめだ、こんな事をしたら大変な事になる。

禿げはまた前を向いたので後頭部が見えた。また某は天誅したくなり、刀の柄を握つて「いひひ、いひひ、うひひひひ」と笑い出した。笑いは止めようにも止められなかつた。笑つうちに突然口を衝いて「天誅、天誅、天誅だ・・・・」と勝手に言葉が出た。柄を握る手がぶるぶる震え、力タカタ音を鳴らし始めた。「うひひひひひ、あはあ、あは、うひひひ」目の前は禿げの後頭部である。いつのまにか外界がぼんやりして禿げの後頭部だけが某に迫つてきた。おお、なんとかがやしき禿げの後頭部よ、それは切り落とすにはふさわしい、禿げの後頭部、禿げの後頭部、禿げ、禿げ、天誅、天誅・・・

禿げが突然店の中に入った。畜生と思いつつ、某は正気に戻つた。自分は何をしようとしていたのだ、大変だ。

店からあの禿げが現れた。後姿を見るとまた某は刀の柄を握つて「いひひ、いひひ、いひひひひ」と笑い出し「天誅、天誅、天誅だ・・・・」とはつきり咳きながら、とうとう、刀を抜いた。刀を持つてじりじりと狂気の様相で禿げに近づいた。

禿げは振り返つた。某はあわてて平静を装つた。早く後ろ向け、後ろ向け、と心に願つた。

案の定禿げは後ろ向いた。すぐに刀を抜き、「天誅だ、天誅だ、天誅だ」と咳き、彼に近づいた。

また禿げはいぶかしげに振り返つた。某はいらいらした。心で念じた。おれはきさまを切り落としたいんじや。きさまの血がほしいんじや、はやく後ろ向け、向け、向け、ば・か。向けやおら、向け向け。早く切り落としてせいせいしたいんだ。向けー！

禿げが後ろ向いたとき、某は刀を抜き思わず「天誅だ————！————！」と叫びながら禿げに走つて襲い掛かつた。それに気付いた禿げは逃げ出しだが、時すでに遅く、禿げは切り落とされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8468m/>

---

天誅だ！

2011年10月7日09時46分発行